

# 丸善学校のマイスター 八木佐吉

八木正自

まずは丸善創業百五十周年、おめでとうございます。  
大正五年に入社以来八〇歳まで、丸善一筋であった父にとつて輝かしいときはいくつかあった。

その一つ目は、昭和七年十一月に催した「天正使節渡欧三百五十年記念 珍籍展覧会」で、入社して一六年経った二九歳のとき。まだはつきりした古書部が無い時代で、社内から向きの人間が集まって作成された目録。先輩や同僚と共に一心不乱で解題、編集に取り組み印刷所への出張校正や製本所との往復で、最後は展覧会当日の朝に製本が出来上がったと記録にある。



天正使節渡欧三百五十年記念  
珍籍展覧会目録

これは前年に、イタリア、ローマのオットー・ランゲ書店の謄写版刷り古書目録中にきりしたん版の『ぎや・ど・ぺかどる』（一五九九年刊、現重文）上巻を見出し、すぐに電報

で発注すると首尾よく送られてきた。丁度天正四少年使節渡欧から三五〇年に当たるので、関連の稀覯書や古地図二百余点を急遽集めて開催したところ、各新聞で大きく取り上げられ大反響を得て、営業的にも好成績を収めた。この目録の表紙は、『ぎや・ど・ぺかどる』の飾り枠を使ったもので、題字は新村出筆。このきりしたん版は社宝として持つことになり、翌年に文部省から重要美術品の指定を受けた。

このときこのチームにいた栗本癸未は伝説的な丸善の西洋古書通。一四歳のとき明治三〇年入社で、以来昭和一二年に亡くなるまで洋書一筋。明治三四年入社ですぐに「學鑑」編集に携わった内田魯庵の洋書の知恵袋は栗本と言われている。父は明治三六年東京橋生まれ、麹町尋常小学校卒業に際し、勉学を続けたい為に丸善夜学会があるので見習生として入社。すぐに洋書ストック係に配属された。夜学会へは東京帝大の学生が先生として授業を行い、英・独・仏語を学んだ。三年間で修学すると手代となり、それまで着られなかった羽織と足袋が支給された。

まだ右も左も分からない入社翌年のとき、分厚い目録を手にも栗本を訪ねて来た若き学者があった。父はそのときお茶を

出したとのこと。これが後に東洋文庫大コレクション形成の発端で、そのときのリストは石田幹之助が持ち込んだモリソン・コレクシヨンの目録であった。東洋文庫の開館は大正一三年。岩崎久弥三菱の購入となったそのコレクシヨンを中核として、更なる収集が進められ、丸善を経由してきりしたん版が二点、『下チリナ・キリシタン』（一五九二年、天草刊、現重文）、『聖教精華』（二六一〇年、長崎刊）、ジョン・セーリス自筆『日本渡航記』（現重文）などが加わり、和田維四郎コレクシヨンの和古典籍及び漢籍も併せて設立された。

手代となった父は、神様のような栗本から『ペリー提督日本遠征記』一冊を買えと言われ、一円八〇銭（月給一二円）でその本を手にした。これが古書蒐集が病みつきになるきっかけであったと後述している。

二つ目は、昭和二四年のニューヨーク、クラウス書店古書目録にやはりきりしたん版『精神修養の提要』（一五九六年



「洋学ことはじめ展」目録

刊)が掲載されていたのを、一年後に気づき発注。これも首尾よく取れ、昭和二七年に「丸善新館落成記念」と銘打ち「新回収「きりしたん版」を中心とした日本

及び東亜関係古文獻展覧会」を開催した。このときも他に集めた、「シーボルト自筆書簡集」、シーボルト著『日本』、出島版ボンペ著『薬学提要』なども展示し、目録も作った。

昭和二九年に上野図書館で旧幕所蔵の蘭書約四千冊が発見され、緒方富雄を会長とした「蘭学資料研究会」が発足し、その年の一二月に丸善が場所と目録作成を提供して「洋学ことはじめ展」が開かれた。そのとき感謝の気持ちとして、会員の署名をした目録が父に手渡された。会長、大島蘭三郎、岡村千曳、大久保利謙、鮎沢信太郎、岩生成一、沼田次郎、朝倉治彦、内山孝一ら錚々たるメンバー。

三つ目は、父が丸善を通じて知り合えた、顧客という枠を超えた知己であろう。東洋文庫以来の東京帝大東洋史学科出身の石田幹之助。『内田嘉吉文庫稀観書集覧』目録がありその文庫を作った台湾総督府民政長官でもあった内田嘉吉。マ



展覧会場での中山正善真柱(左)と八木佐吉(右)

カオ版、サンデ編『遣欧使節対話録』（一五九〇年刊）をオランダ留学中に回収してきて、昭和七年の展覧会にも多くの助言をくれた慶大歴史学者の幸田成

友。水戸の徳川昭武の息で海軍技術者であった徳川武定。朝日新聞社社長の上野精一。日本経済新聞社記者を経て社長となった小汀利得。古地図収集家であった渡辺紳一郎、等々。

そして最大の顧客であり、終生の知己を得た天理図書館創設者の中山正善天理教二代真柱。昭和五年の新図書館開館以來一貫して内外の図書・布教関係書・貴重書を蒐集。その質に於いては我が国最大を誇る。丸善からは社宝としていた『ぎや・ど・べかどる』（現重文）を、父の大阪支店次長のとき昭和二五年に納入。『精神修養の提要』も購入となった。他に、東京帝大時代宗教学科の姉崎正治門下で同窓であった、東京都公文書館にいた財部健次のインド文献コレクションなどの購入を斡旋。財部は父に真柱を紹介してくれた人。真柱が東京に来ると染井の東京教務支庁あるいは麹町のお屋敷に滞在され、同所か料亭かで東京の古書店主達が呼ばれて歓談することがしばしば。神田の八木書店と区別するため、『まるやぎ』、『かんやぎ』と通称していた。時に熱海に滞在しているからすぐ来いと言われて、列車だかタクシーかで行ったこともあった。

父は、洋書部古書係を経て昭和初年に審査課目録係、戦中戦後の洋書輸入途絶期は出版企画部長、昭和二五年から「學鐙」復刊準備で広告課。昭和二七年洋書畑に戻り管理部長、その後和書部長を経て人事部長。昭和四〇年からは最後の役職、二代目「丸善本の図書館」館長に就任。ここでの一八年間は、本の奉仕者としての楽園であり、八〇歳まで丸善に関

わることが出来た幸福な日々であった。

「本の図書館」を訪ねて来る人には分け隔てなく接し、また新しい知己を得たであろう。また、昭和四七年から専門図書館協議会の「ライブラリアン・クラブ」の仲間と知り合えたことも、お互いに共通の知識を交流するという悦楽があったのではないか。例会も「本の図書館」で行うこともあった。

『図書館と本の周辺』という会報を出版。読み応えのある本にまつわる論文が収載されている。第一〇号は「八木佐吉氏追悼号」と題し出して戴いた。

また、丸善内から父の話を聞きたいというグループが起り、無理強いをしない父にとって目を細める程の喜びであったことは想像に難くない。昭和五年から父が没するまで、一八回の例会を行った。「丸善本の会」で会員は父を含めて一二人。会報『理文路』を二号出している。

最後に父の著作。昭和四年以来「安土堂」のペンネームで「學鐙」に寄稿。その他の社内誌、『洋書輸入協会会報』、『日本古書通信』、専門新聞などへの執筆。単行本では、『書物往来』、『書物語辞典』、『洋書の周辺』、『明治の銅版本』、『ケルムスコット・プレス』、『内田魯庵書物著作集』編集。

亡くなる二年前に東京作家クラブより「文化人間賞」が授与され、使用していたペンを大山阿夫利神社に奉納した。

昭和五八年、座右の銘「生涯勉強」を地で行き、丸善学校を六七回生でやっと卒業。幸せな人生であった。

(やぎ・まさじ 佐吉四男・安土堂書店代表)